

國學院大學學術情報リポジトリ

「李娃伝」と物語を支えた人々について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤井, 益久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001504

「李娃伝」と物語を支えた人々について

赤井 益久

論文要旨

唐代伝奇小説を代表する白行簡の手になる「李娃伝」は、従来白居易の私邸における娼妓の「説話」（語り物）を原作とすると思なされてきた。しかし近年、李劍国氏は「李娃伝」と「説話」との関係は根拠がなく、認められないとする説を発表している。本論文では、「李娃伝」の物語の持つ構造から、主人公である鄭生の境遇、とりわけ李娃と知り合ってからいくたびかの「生」と「死」にまつわる「瀕死の機会」に生を救済する形で登場する人物たち―「凶肆」「挽歌うたい」「乞丐」「糞尿処理業者」らに注目し、物語の流伝やそれを支えた人々の存在

を仮に想定して、物語がいかなる人々の希望に添い、欲求を表しているかに注目することによって、物語の本質と唐代中期に澎湃として起こった「伝奇小説」に筆を染めた人々がいかなる視野を持ち、どのような世界を見ていたかを明らかにしようとするものである。

【キーワード】「唐代伝奇小説」^{ちうだいでんきしやうせう}「李娃伝」^{りあでん}「説話」^{カタリ}「汧国夫人伝」^{けんこくふじんでん}
「瀕死と助命」^{ひんしじよめい}

一 はじめに

「李娃伝」（または「汧国夫人伝」）は、唐代伝奇小説の白眉であるだけではなく、中国小説史上も重要な位置を占める作品である。それは物語の内容が紆余曲折、波瀾万丈にとみ、読む者の心を捉えて離さない魅力を持つとともに、当時の「語り物」の影響を受けて

いると考えられてきたからである。宋代、「勾欄」や「瓦舍」と呼ばれる演芸場において、後のいわゆる「講談」や「説話（語り物）」に相当する演芸が確認される以前、唐代にあつては仏教の「唱導」としての「梵唄」「転読」が絵解き口承と結びついた「変文」が広く行われてきたことが認められている。しかしながら仏教説話や歴史説話に取材した物語ではなく、往時の恋愛譚を題材に「語り物」が芸能として行われていたならば、それは文学史上でも注目すべき重要な出来事に属する。^①

張政烺が「李娃伝」を「語り物」とであると見なしたのは理由がある。^② 北宋・曾慥編纂『類説』に「李娃伝」を節録して「汧国夫人伝」と題し、末尾に「旧名一枝花、本説一枝花自演。」の一文を加えている。これは「李娃伝」に基づく『太平広記』が出典とする唐・陳翰編『異聞集』の本文にはなく、後人の付加と考えられる。^③ この付加は、唐・元稹の長律「酬翰林白学士代書一百韻」（『元稹集』巻一〇）にある「翰墨題名尽き、光陰話を聴きて移る」两句に施された自注「樂天每與予游從、無不書名屋壁。又嘗於新昌宅、説一枝花話、自寅至巳、猶未畢詞也（樂天毎に予と遊從し、名を屋壁に書せざるはなし。又た嘗て新昌の宅に於いて、一枝花の話の説る、寅自り巳に至るまで、猶ほ未だ詞を畢へざるなり）」を踏まえていると考えられる。

要するに自注の言う所は、白居易の終生の友人であつた元稹は、白居易の邸宅があつた長安「新昌里」（朱雀門外東第四街延興門に近い）において、「一枝花」の話語り、寅の刻（午前四時頃）から巳の刻（午前十時頃）に至つても、なお「詞」が終わらなかつたと述懐している。^④ 元稹の自注は「李娃伝」をすなわち「一枝花話」であると言っているわけではないが、宋代以降、「一枝花話」を「李娃伝」に基づく「語り物」とであると認めることが大勢となり、文学史上の定論となつて今日に至っている。^⑤

しかし近年、李劍国氏は次のように指摘している。「李娃伝の中でその容貌を『妖姿要妙、絶代未有（妖姿要妙にして、絶代未だ有らず）』と言っているが、李娃を花に喩えてはいない。また、自家の人々が一枝花話を語ることができたとも言っていない。白居易が自宅に於いて聞いた「一枝花」は無名の娼妓の芸名（源氏名）であつて、李娃伝とは何の関係もない。^⑥」この指摘は傾聴すべきであると同時に、従来なにゆえに「李娃伝」すなわち「一枝花話」であると多くの支持を得たかを改めて考え直す必要がある。本論では、「李娃伝」を今一度中国小説史進展の過程へ投げ入れて考察する必要があると考えている。

二「小説」の概念と規範

中国文学史において「小説」が文学の様式として意識されたのはそう古い話ではない。したがって学術史や書誌学とも呼ぶ分類から言っても、従来の「歴史」や「諸子」という分類には馴染まず、歴史的に見ても大いに揺れていることが確認できる⁽⁸⁾。ある時は歴史を補完する「野史」「稗史」として分類され、ある時は諸子から派生した一分野として扱われた。それだけ中国の学術から見れば「小説」というジャンルは新しく、未知なものとして扱われてきた。書誌学における分類上の大きな揺れは、それを物語っている。中国文学の伝統様式は、牢固とした伝統性と規範性が認められ、一旦定着すると長い間変化することはなかった。それが処世観や世界観、人間同士の関係性の変化、価値観の変化が同時に訪れて、様式に大きな変化を求めるようになり、文学の規範が変容し出す時期がある。中国文学史上強いて挙げれば、東晋期、唐代中期いわゆる「中唐」期、アヘン戦争以降の近代文学の黎明期などである。

「中唐」期には、今日言う所の小説の誕生、新しい文体の改革、文学における自発的運動などが顕現している。中国文学の規範は、従来それを担った人々の価値観や世界観に基づき形成されてきた。それが内部から自律的に変容し、変化することは基本的にない。文字が読め、古典に習熟し、古典世界の価値観を共有できる人々、いま仮にそうした人々の世界を「雅」（あるいは「文」）なる世界と呼ぶならば、その枠内の人々が文学の規範を決定してきたのである。その枠外は「雅」なる世界ではなく、「俗」（あるいは「野」）なるものとして排除され、存在していても視野に入ることにはなかった。しかし「中唐」期には、その枠内にありながら枠外を意識でき、枠内外を越境できる人々、言い換えれば従来の規範からはじかれてしまうものに価値を覚え、関心を引かれる人々が輩出された時代とも言える。

その埒外から刺激を受けて始めてその規範は変容するようである。「雅」なる世界の枠外に「俗」なる世界を想定してみて、その規範は初めて外郭を持つことになり、相違や特徴を自覚できることになる。

以上を確認して「李娃伝」における物語の枠組みを見てみることにしよう。まずは話柄の輪郭から見る。「李娃伝」はまた別に「汧国夫人伝」と呼ばれるように、物語は長安の娼妓である李娃が蔡陽公生（恐らくは鄭姓）に付き従い、内助の功を立て、孝養を尽くす

良妻賢母として生き、周囲から認められ、やがて称号を得るに至る「発跡変泰（立身出世）」物語として描かれている。

一方、主人公である榮陽公の一子である生は、大金を持って上京し、娼館に入り浸って有り金を巻き上げられ、幾度もの瀕死の状態から救済され、李娃の献身的な看病を得て、科擧に首席及第して仕官し、成都府参軍を振り出しに、やがて数郡の高官を歴任して、四人の子供も皆出世するという、いわば「貴種流離譚」のごとき趣を持つ作品として描かれている。

こうした話柄全体の外形は、士人階層が夫人や妻に求める理想や出世における在り方を反映している。これらは、いずれも当時の士人階層の持つ倫理観・価値観や処世観に支えられ、構成されていることが分かる。しかし、「李娃伝」が文学史に独自の地歩を占め、人々の耳目を引き、読む者を魅了するのはじつはこの点ではない。すなわち、話柄の外形としては「婦人操烈の品格」を問題にし、「弟兄姻媾皆甲門にして、内外隆盛、之より京^{きやう}んなるは莫し」を標榜しているが、その物語が包含する意義はこうした旧来の価値観を大きく逸脱し、それゆえに新しさを有している点にこそあると言える。

その新しさの一つが、李娃と榮陽公生とを物語を織りなす縦糸とするならば、この両者以外の第三の人物形象が物語を織りなす横糸として明確な輪郭を持って描かれていることである。女性の主人公を第一形象、男性の主人公を第二形象とみなし、唐代伝奇小説の多くは、それ以外の第三の人物形象によって物語が進展するところに特徴があることは別に述べた。⁽⁹⁾ この第三人物形象が従来の文学には描かれなかった規範の外にあった群像であると思われる。つまり、従前には視野に入らなかった人物像がとらえられ、それらの人物が物語に影響を与える立場として登場しているのである。小説が新たな様式として一定の認識を得ると同時に、その作品自体の形成にその人々の立場や身分が影響を与えるようになった。その意味で、「李娃伝」は好個の例と言える。

それでは、周知の物語ながら、そのあらすじをたどってみたい。

三 「李娃伝」の構成

物語の外郭として全体を貫く要素、すなわち縦糸として榮陽公生の「生」と「死」を巡る経緯についてとくに注意し、分断して示し、

榮陽公生が死に瀕する機会に注目してみたい。

【丁出会いと破産】 汧国夫人である李娃は、もとは長安の娼妓である。天宝年間、常州刺史に榮陽公なる者がいた。家門高く名望があり、一家は繁栄していた。榮陽公は五十歳になって二十歳になる一人息子がいた。聡明で詩才があり、周囲の人から認められていた。父親も家門の誉れと自慢していた。郷試を経て應奉のため都に上ることになった。父親は一度で合格すると思ったが、二年分の路銀を用意した。榮陽公生はひと月ほどして長安布政里に宿を取った。ある日、東市に遊びに行く途中、平康里東門からその西南に住む友人を訪ねた。鳴珂曲の一画にまで来ると庭を構えた屋敷が見える。門の片方を閉ざし、李娃が下女にもたれながら佇んでいるのが見えた。その美しさはいままで見たこともない。女の気を引こうと馬鞭を故意に落とし、従者に拾わせた。その様子を見た李娃は心引かれた様子であった。生はそれ以降、心ここにあらずで、長安に詳しい友を呼んで事情を尋ねた。そこは花街、李氏の屋敷であり、李娃との付き合いは皆貴戚豪族で、心を動かすことは難しいとのこと。生は百万を出しても惜しくは無いと思った。かくして生は衣装を整え、供を連れて李娃の屋敷を訪れた。出迎えた侍女は、先日の馬鞭を墮とした若様ですと伝える。聞いた李娃は嬉しそうに化粧を整えて迎える用意をする。ほかにこの屋敷の主である白髪の老婆（「仮母」とも言い、所謂「遣り手」）が生を迎えた。生は空き部屋を捜す振りをし、李娃との仲介を申し出る。出てきた李娃を目にすると容貌容姿、立ち居振る舞い、どれもが洗練され、まともに見ることができなかった。日が暮れ、老婆が生に住まいを尋ねると、生は引き留めて欲しかったので、延平門を出て数里と偽った。老婆は「犯夜」の禁を犯すのは善くないと早く帰れと進めるが、李娃がそれを引き留める。かくして泊まることになった生は老婆に礼として絹を贈ったが、老婆は受け取らなかった。生を接待する部屋は家具や調度も豪華なことこの上なかった。二人きりになると、生は李娃を見初めたときのことを語り、李娃もその時の思いを伝えた。すると老婆が再び現れ、生の真意を確かめる。じつは住まいを捜すだけではなく、李娃に思いを伝えたいがためと申し出る。老婆は言う。「男女の際、大欲存す。情苟も相得れば、父母の命と雖も、制する能はず」と言い、二人の関係を許す。生は仮母に孝養を尽くすと誓い、仮母も生を婿とみなす。生は荷物を李娃の屋敷に移し、身を隠して親戚知友との交わりも断った。やがて持ち金を使い果たし、家財も売り払い、無一文になった。金の切れ目が縁の切れ目、老婆は生が一文無しになっ

たのを見限ったが、李娃の愛情は変わることはなかった。

【Ⅱ偽計と憤慨】ある日、李娃は一緒になって一年、子供ができないので「竹林神」（長安朱雀門外西南隅興聖尼寺）に参詣に行きたいと申し出る。生はこれが計略とは知らず、衣装を質入れて供物に代え、二泊して無事参詣を終えた。帰途、李娃は近くに小母の家があるのので立ち寄り挨拶をしていきたいと言う。同意した生が進んでいくと、立派な屋敷があり、二人で訪問する。中年の婦人が現れて李娃と久闊を叙す。竹が青々と繁り、池が広がり台がある風景は幽玄な趣がした。その屋敷の一棟に入り懇談する。暫くすると早馬で、仮母急病により危篤という知らせが届く。李娃は小母に告げて言う。一足先に私が早馬で帰り、折り返し馬をやるのでそれに乗って生と共に来て欲しいと。生は李娃と共に帰ろうとしたが、葬儀の相談があると小母が遮るように止めた。日暮れになっても迎えの馬は来ない。小母は訝しいので様子を見に行ってくれと生に頼む。旧宅に戻ってみると門扉は厳重に閉じられて入れない。隣人の邸主に尋ねると、李家はもと借家で約が満ちてここを引き払い、他所に移ったとのこと。小母の屋敷があつた宣陽に引き返し、詰問しようとした。日も暮れて距離もあつたので、衣服を質に入れて食事に代え、安宿に泊まった。まんじりともせず寝に着けなかった。夜明けに小母の家を訪ね、門を叩くが応じる声はない。暫くすると、宦者が出てきて言うには、昨日ある者が知り合いを迎えるために一日だけ屋敷を借りに来て夕刻に戻ったが、本来ここは崔尚書の邸宅であるとのこと。生は驚愕し、憤慨の余り気が狂わんばかりになった。もと居た布政里の宿に戻ると、宿の主人は生を憐れみ食事を用意してくれたが、喉を通らず重い病気になった。

【Ⅲ瀕死と助命】十日経つと病は益々重篤になり、宿の主人も諦めて生を葬儀屋街（原文は「凶肆之中」以下同）に運び込んだ「第一次瀕死」。絶命寸前の生を同業者ら（「合肆之人」）は同情して面倒を見た。徐々に恢復した生は葬儀屋の手伝いをして糊口を凌いだ。数か月して健康を取り戻した生は、仕事の中で挽歌を聞き時間の推移を悲嘆し、堪えられずに涙を流した。家に戻ると見よう見まねで挽歌を模倣した。才能があつたと見えて、長安随一の歌い手になった。折りしも、長安にある東西葬儀屋組合の展示競争があつた。東側は何れにおいても勝っていたが、挽歌だけは西側に劣っていた。生の才能を見抜いた東側の頭領は錢二万を出して生を雇い、新曲を授けて競争に臨んだ。競争の当日は数万の人が押し寄せ、非常な賑わいを呈した。靈柩車、葬具は何れも西側が劣っていた。挽回を期して最後の挽歌比べになると、西側は満を持して「白馬の詞」を披露する。辺りを睥睨して自信満々である。東側は長椅子を重ねた台

に黒頭巾の若者が供数人を連れて登壇する。生である。自信なさそうに登場すると、衣服を整え、喉の調子を見ると「薤露の章」を歌い出す。その悲しみの歌いぶりは辺りを圧倒し、樹木をも震わせるほどであり、聴衆は皆涙を誘われた。西側はこそそと逃げ帰る有様であった。ちょうどその時、地方の使職が都に上るようにとの詔があり生の父親である滎陽公が都に居た。父親は同僚と衣服を替えて雑踏に紛れていた。付き従う下僕は生の乳母の夫であり、挽歌歌いが生に似ていると注進する。父親は息子が大金を持参していたので盗賊に襲われ死んだと思っていた。乳母の夫は葬儀屋仲間に見聞いてみる。挽歌歌いは何処の誰かと。生の名ではない。もしやと生に近づくと下僕、それを悟った生、逃げる者と追う者、緊迫の場面である。逃れることができないと観念した生、幼い頃より養育してきた下僕の目には生であることは間違いないと映っていた。二人は抱き合って泣いた。父親の宿に着くと、父親はかくの如き生き様をして家門を汚し、何の面目があつて父の前に居ると大いに怒り、曲江の西、杏園の東（長安城東南の外れにある景勝地）まで連れて行き、衣服を剥ぎ馬鞭で数百回打ち据えた。生は斃れ、父親はそれを見捨てて立ち去った「第二次瀕死」。挽歌の師匠はそれを見るに忍びなく、配下に生の骸を埋めるように指示した。すると心臓辺りがまだ暖かいので、様子を見る。葦の筒で飲み物を流し込むと、一晩で息を吹き返した。一月を経過するも手足は動かせず、鞭打たれた所は壊死腐爛し、葬儀屋仲間も諦めて道ばたに放棄した（「棄於道周」）「第三次瀕死」。道を往来する者が残飯を与え（「行路咸傷之、往往投其餘食」）、生は空腹を満たした。十日もすると杖を頼りに歩くことができ、襤褸を纏い、欠けた碗を手に町中を乞丐して回った（「持一破甌、巡於閭里、以乞食爲事」）。秋から冬になると、夜は糞尿処理場（「夜入於糞壤窟室」）で寒さを凌ぎ、昼は店先を門付けして回った（「晝則周遊塵肆」）。

【Ⅳ再会と団円】冬至り、長安に大雪が降る。飢えに駆られた生は雪の中を食べ物求めて物乞いに出る。その声は哀切で聞く者の同情を誘った。雪はひとときわ激しくなり、人家は皆固く閉ざされている。安邑里（東市の南）の東門、区画に沿って北に向かい七八軒目の家だけが左側の扉を開けていた。そこそ李娃の家であった。その扉に向かって生は飢えと凍えを訴える。李娃はその声を聞くと、生に間違いないと侍女に言い、部屋からはじかれるように出てきた。見れば身は痩せ衰え、体はできものだらけで人間とは思われなかった。李娃は驚き、その人を生と認めた。生は李娃と分かれると憤りの余り気絶した。李娃は生を介抱しながら、自らの罪に卒倒しては我に返った。仮母はその騒ぎを聞きつけ、生を追い返せと迫る。李娃はその申し出を峻拒し、その理由を述べていく。本来は出自立派な

榮陽公生から金品を奪い取り、天によって定められた父子の關係を断ち切り、親に子殺しをさせ、人をここまで追いつめたことは全て自分の責任。榮陽公の親戚は朝廷に沢山おり、その顛末を知れば禍が及ぶこと必定。天道に従わず、人倫に背いた以上は、鬼神も助けはくれないと。そして、身請けの金を用意して、仮母には孝養を尽くすと誓う。生と二人で近くに家を借り、献身的に看病した。病癒え、健康を回復した生に勉学の意思を思い起こさせ、書物を買に行き、再び學問を志した。李娃はいつも生の側で支え、絶えず励ました。生も精勵し二年の修養を積んで科挙甲科に合格した。官界に生の名は知れ渡った。李娃は生のこれまでの生活と行いが他人と大いに異なるので、さらに努力をすべきであると戒める。生は制科直言極諫科にも首席で合格し、成都府參軍を授かった。赴任するに及び、李娃は申し出る。すでに生は健康を回復して科挙にも合格し、官途も定まった。これから後は仮母に孝養を尽くしたいので、名門の娘を嫁に迎えて欲しいと。自らは身を引く覚悟を示す。生は、それならば自らは死を選ぶと譲らない。李娃は劍門（四川省）まで送ることで、生を納得させる。折りしも、生の父である榮陽公が劍南採訪使として任命され、劍門で会うことになる。再び逢った父親は、生の出世の経緯を聞き、李娃を引き留め、正式な婚儀を整えて二人を結婚させた。李娃は先祖を祀り、家を治め、舅姑に孝養を尽くした。舅姑の服喪中にはいくつも瑞祥が現れ、朝廷からも恩賞が与えられた。生は高官を歴任し、李娃も汧国夫人の称号が下賜された。四人の息子は何れも名門の一族と結婚して、大いに繁榮した。

以上、煩をいとわず長々と見てきたことには理由がある。物語は、たしかに娼妓李娃がいかに汧国夫人にまで至るかが描かれており、また榮陽公生の立身出世物語にもなっている。しかし、物語の面白さはその成功と繁榮を導くに至る、挫折と困窮、死と背中合わせの境遇とその後との落差にあると思われる。物語の構成から見ても、【Ⅰ出会いと破産】【Ⅱ偽計と憤慨】【Ⅲ瀕死と助命】【Ⅳ再会と団圓】の中で、とりわけ【Ⅲ瀕死と助命】が物語の流れから見て最高潮とみなして良いであろう。

李娃にとって生は一人の客であったに違いないが、相思相愛であったことも確かである。有り金を使い果たした生を仮母は疎んじ始める。その際の二人は「邇来 姥の意漸く怠り、娃の情弥いよ厚し」と対称的である。屋敷から追い出す算段として「籠脱け詐欺」を仕掛け李娃も加担するが、再会叶った後の李娃は殊勝である。生を死に追いやった事を悔い改め、懇切な看病で回復を図り、再び勉強

の意欲をかき立て、環境を整えて励ます。生が応挙の意思を固めても、なお「未だし。且つ精熟し以て百戦を俟たしめよ」と自重を促し、科挙甲科に合格して浮かれている生には、「未だし。今の秀士苟も一科第に擢せらるるを獲れば、則ち自ら謂へらく、以て中朝の顯職を取り、天下の美名を擅にすべしと。子が行ひ穢れ跡鄙しく、他士に侔しからず。当に利器を磨淬し、以て再捷を求むべし。方に以て多士と連衡し、覇を群英に争ふべし」と周到である。

また、最も印象深いのは、生が及第して仕官するに及び、自らは身を引き「今之れ子を本軀に復す。某は相負かざるなり。願はくは残年を以て老姥を帰養せん。君当に媛に鼎族に結び、以て蒸嘗に奉ずべし。中外の婚媾、自ら黷すことなかれ。勉強自愛せよ。某これより去らん」という覚悟を開陳する場面である。健康を回復し、元の身に戻して約束を守った。残りの月日は仮母に孝養を尽くしたい。これからは名門の娘を嫁に取り、祖先を祀り、婚姻こそ名家にとつての一大事、自ら汚すことをしないようにと言ひ含める。婦人の徳と生き方とを鮮明に表白して潔い。

この物語の末尾に、作者の白行簡が「嗟乎、倡蕩の姫にして、節行是くの如し。古先の烈女と雖も、踰ゆる能はざるなり。焉くんぞ之が為に歎息せざるを得んや」と論評するように、まさに烈女の鏡として捉え、女性はいくあるべしとの力が働いていることを明らかにしている。これは作者に連なる士人階層の女性に求める理想像が反映していると考えるべきで、この物語を外郭で支えている。

四 「李娃伝」を支えた人々―「凶肆」「乞丐」

この物語の伝播を考えるととき外形を支える中身は、前述したように李娃の「発跡変泰」ではない。生が生死の境にある「瀕死」の際に、死の淵から助ける人々の存在によって物語は起伏に富み、かつ進展していることに気づく。すなわち、滎陽公生は登場する「いやしき人々」の救済によって生きながらえ、かつ物語の骨組みとして目立たぬが力強く支えられていることに留意したい。「李娃伝」の構成を示した際に挙げた「第一次瀕死」から順次その存在を見ていくことにする。

「第一次瀕死」「籠脱け詐欺」によって街中に無一文で放り出された生は、憤激の余り発病し、治る見込みがないと思われた生は葬儀屋街に捨てられる（ここに遺棄すれば、弔ってもらえるという市井の人々の思いが窺える）。Ⅱ「凶肆」（葬儀屋）の「合肆の人」（葬儀組合の人々）によって救済される。

「第二次瀕死」父親に馬鞭により鞭打たれて斃れる。⁽¹⁰⁾Ⅱ挽歌の師匠、同輩により助命される。

「第三次瀕死」父親に受けた傷は腐爛して治る見込みが無いと道端に遺棄される。Ⅱ「行路」の人々が残飯を与え、命を永らえる。「乞食」「乞丐」により飢えを凌ぎ、「糞壤窟室」に寒さを避け、「塵肆」に門付けして生き永らえる。

生が瀕死の際に、きまつて救済するのは市井の人々、しかも当時にあつて社会の最下層と思われる人々であることが分かる。これらの人々はいわゆる唐律の定める良人・賤人にも含まれず、国家の管理の外にあつた。こうした人々は歴史に登場することはなく、当時の実際はつぶさには知り得ないが、明らかに前述した文学規範の埒外にある人々である。すなわち、世には存在していても文学規範を決定する人々の視界には入らない人々である。したがって、こうした人々が物語に影響を与えていること、すなわち文学を担う人々の視界に入り、その人々に影響を及ぼし、文学規範に対して刺激を与え、あるいはその変容を促す働きをしていると見なければならぬ。そうであるとすれば、この物語の伝播はひとり士人階層の価値観や倫理観のみで描かれていないことは自明であろう。

それでは、榮陽公生を助命し「死の淵」から再び「生」へ蘇らせた人々の存在を見ていくことにしよう。死の淵にあつて路頭に迷う生を救った「凶肆」（葬儀や葬具を扱う店）は、古来社会より欠くことは無かったと考えられるが、その詳細は今なお不明な部分が多い。『太平広記』巻二六〇・嗤鄙「李佐」に次のような話を伝えている。

山東の名士李佐は、安史の大乱で父を失った。のち科挙に及第して京兆府少尹を拝命する。密かに父の行方を探索したところ、知る者から知らせがあつた。葬儀の道具を扱う店（鬻凶器家）に迎えに行き、孝養を尽くした。数か月後、父は李佐に言う。父は三十年も「此の党」の中に居り、未だ礼も言っていない。仲間に酒を振る舞い、馳走を奢れば悔いはないという。そこで李佐は数日を掛

けて用意し、東西両市の「薤歌を善くするもの」(挽歌うたい)百人を呼び宴を開いた。初めは整然としていたが、やがて騒がしくなった。皆は父を担ぐと挽歌を歌い出し、百人はこれに応じた。路傍で見る者は数万に上った。父の行方は知れなかった。李佐は家を捨てて山に入り、数日で亡くなった。(出典は、唐・李冗『独異志』⁽¹⁾)

李佐の父親は「安史の大乱」の後、難を避け三十年の間葬儀屋街に身を潜めていたこと、仲間を「党」と呼び強い連帯で結ばれていたこと、そのうちとくに挽歌うたいに秀でていたことなどを読み取ることができる。この「凶器を鬻ぐ家」こそ葬儀屋であり、「此の党」こそ挽歌歌いを含めた強い結びつきを持っていた一種の職能集団と言つてよい。その人々の社会はそのまま大衆に広がっていたと考えられる。この職能集団は、いわば社会の裏面を支える働きを有し、社会から逸脱し、そこから逃避する人々にとって大きな受け皿となっていた。三十年もの間逃避を可能にし、「死」の世界に近い集団社会の存在は、断片的な記載ながら十分窺うことができよう。そして、「挽歌」(棺を引くときの挽き歌)という芸能と結びついていることも「李娃伝」に共通する要素と言える。

「凶肆」(葬儀屋)で働く人々は、「合肆の人」あるいは「此の党」と呼ばれ特別に強固な連帯があったと思われ、「第二次瀕死」において、父親に曲江の西、杏園の東で鞭打たれて一旦は死んだ生を救い出したのは、他ならぬ「挽歌」の師匠や同輩であった。「合肆の人」の中でも、とりわけ師承関係の強い職能集団であったことが推察される。

「第三次瀕死」における生を死の淵から救ったのは、同様に社会の底辺で生きる「乞食」「乞丐」である。史料から見て用語としての「乞食」は、仏教で言う「頭陀」や「托鉢」と同義の場合が多いが、仏教から離れて食物や金品を人より恵んでもらう意味の例を見てもよい。

『太平広記』卷三六七・妖怪九(人怪)「無足婦人」には、以下のような話を伝えている。

晋の時代、一人の婦人がいた。容貌は端正、衣服は華麗であったが、両足が無かった。その父親は彼女を一輪車に乗せ、鄴(河北省臨漳)の南から浚都(河南省)にまで出かけていき、市場で物乞いし、日に千人を集めた。深い路地から入り組んだ道、高官の屋

敷まで行かない所は無かった。時の人は同情を寄せ、物を恵み投げ銭を与えた。のち北戎の間諜を捕らえると、この婦人こそ奸人の領袖であつた。手に入れた情報は多く、役人はこれを誅殺した。(出典は、五代・王仁裕『玉堂閑話』⁽¹²⁾)

身体に障害を持つ美人を市において見世物にして金品を受け取り、「深坊曲巷、華屋朱門に至るまで、至らざる所無し」という徹底ぶりて人を集めていた。北戎の間諜であつたという要件を除くとしても、すでに「乞食」「乞丐」が職能的な集団結社であることを匂わせ、社会の情報に通曉していたという点、「奸人」との結び付きを示唆する点、生が依拠した「乞食」「乞丐」という行為の背景にある社会を考えさせる。また、見世物や遊芸と結びつき易く、以下のような例を認めることができる。

『太平広記』卷四四六・畜獸十三(彌猴)「楊于度」には、次のようにある。

蜀の楊于度はよく「胡獠」(アカゲザル)を飼ひ慣らし、街中で猿回しをして金を稼いでいた。大小十数匹の猿は皆人語を解し、犬に跨がり、役人が出かける様子を真似し、前後を叱りつけたり鞭を打ったりし、冠をかぶり靴を履いた。酔つ払いに扮すると地面に伏し、助け起こすもしばらくは起きない。「町役人が来たぞ」と言っても起きないし、「御史中丞様のお出ましたぞ」と言っても起きない。「侯(猴)侍中のお越し」と言うると急に飛び起き、恐れる振りをして笑いを誘った。(出典は、五代・景煥『野人閑話』⁽¹³⁾)

同じく『太平広記』卷四五九・蛇四「安陸人」には、左のようにある。

安陸の人で姓を毛と名乗る者は、酒と共に毒蛇を好んで食べていた。以前、齊安に出かけた折、予章(江西省)に行き市場で蛇を見世物にして金を稼いでいた。十年そのような生活をしていると、ある日薪売りの男が鄱陽よりやって来て老父を夢に見た。老父は、自分のために一匹の蛇を江西の蛇使いで毛という者に送ってくれと。予章に着くと薪は全て売れた。船の中に一匹の青白い蛇がとぐろを巻いているのを見つけ、触ると動かなくなった。薪売りは以前の夢を思い出し、これを持参して市場に行き毛を尋ねた。毛は蛇

を動かそうとすると、乳を嘔まれた。毛は気を失い倒れた。暫くすると体は腐り始めて、蛇も行方知れずになった。(出典は、五代・徐鉉『稽神録』⁽¹⁵⁾)

「楊于度」には、後半に後日談があるのだが割愛した。また「安陸人」は、話を毒蛇を好んで喰らった毛なる男が毒蛇に報復される因果応報譚として読むべきであろうが、ここで注意したいのはその点ではない。この両話の注視すべき点は、何れも市場において人々に「猿回し」や「蛇使い」を演じて金品を手に入れている人物を描いていることである。「楊于度」に見られる「猿回し」の演出は内容から判断して相当に熟練した芸であったと思われる、「安陸人」では十年もの間そうした生活が続いたというのであるから、すでに職業化した「乞食」「乞丐」であったと考えられる。こうした例を見ると、歌唱や楽器演奏が「猿回し」や「蛇使い」と同様に、人前で披露しては金品を受ける一種の芸能としてあったと想定することは、そう無理な話ではないだろう。

それを窺わせる史料が『太平広記』巻八五・異人五「撃竹子」にある。

成都の酒屋に竹の拍子木を打つ者がいる。三十ばかりでこの誰かも分からない。手に竹を二本持ち、それを打っては甲高い音を響かせ、調子を取りながら歌を交えては聴く者に金品を求めていた。その歌う内容はさながら道教の趣旨に合致していた。金を得ては酒を飲み、こうして十数年が経過した。ある日、東市の薬種問屋黄氏の家に行き、悠然と言った。貴殿は長い間道教を好み、義氣を重んじているので、わが誠を捧げたい、如何かと。黄氏は聞かせて欲しいと答える。「竹打ち」は、自らは乞食であり、北門外の七里亭の橋の下に居る。しかし病を得て重篤であり、自分が死んだら、茶毘に付し、心臓だけは焼かないで欲しいと頼む。言い終わると金を置いて去って行く。翌日、黄氏が橋の下に行くと「竹打ち」は病の床に伏せていた。その時も、屍を焼くときに心臓には触れないで欲しいと頼んで息絶える。黄氏は悲しみ涙を流した。死に装束に替え、棺を用意し、郊外において焼くことにした。すると不思議な香りが漂った。心臓だけが焼け残った。黄氏はこれを街に持って帰り棍棒で割ると爆弾が破裂したような音がした。すると、一尺ほどの人間が煙の中から出てきた。それこそ「竹打ち」であった。手に竹の拍子木を持ち、音を立てながら上空に飛翔した。衆

人は皆驚いた。「竹打ち」は黄氏を通して自らの昇仙を叶えさせたのであろうか。（出典は、五代・景煥『野人閑話』⁽¹⁶⁾）

話の内容としては、居酒屋で乞食に身をやつした男が拍子木を打ち、歌を歌いながら聴く者に金品を恵んでもらう生活を生業としていたことが分かる。男はじつは神仙であり、それゆえに歌う内容が道教の趣旨に合致したという件は、結末の「尸解」「昇仙」に結びつく文脈として一貫している。この話でも、この世における「乞丐」は、楽器や唱歌によって生活している芸能者であることを示唆している。とくにこの話には末尾に、次のような一文を付している。「この話を通して、我々は成都が神仙の集う場所である事を知った。竹打ちのような人間は多い。およそ、貧賤で乞食のような男であつても侮ることはできない（始知成都遇神仙所聚之處。如撃竹子者、亦以多矣。大凡不可以貧賤行乞之士而輕易者焉）」胡亂な風体で街を徘徊し、時に拍子木を打って囃し立て、歌をうたいながら物を乞い歩く「乞丐」「乞食」は、じつは神仙に近い存在であると言うのである。

醜陋怪異な人間がじつは「道」や神仙に近い存在であるとみなすのは、『莊子』徳充符篇の「哀駘它」などの例に見える。人間の外見に惑わされて本質を見抜けぬ態度を批判的に指摘する説話と考えられるが、同時にこれらの存在は「聖」と「俗」の差別を超越し、その間を自由に行き交い、彼此の境界を無化する立場であることに思いを致すべきである。

この「いやしき人々」が彼らの世界において独自の伝承や物語をもち、それを語り伝えていたことは容易に想像できる。その原型が士人らに影響を与え、視野に入ってきたとすれば、唐代伝奇小説の規範の拡大に大きく寄与したと言えるだろう。

五 「李娃伝」を支えた場―「市」「道」「橋」「街」

生と死の間に生きる「凶肆」の人々、とりわけ「挽歌」を歌い大衆を魅了する人々、「聖」「俗」の境界を超越し既存の価値に束縛されない「乞丐」「乞食」の人々、それらの人々が独自に自らの立場から物語を紡いでいくことは容易に想像できる。そして彼らが生きた世界が『市場』（無足婦人）『自鄴南遊浚都。乞丐於市。日聚千人。至于深坊曲巷、華屋朱門、無所不至』、『安陸人』、『恆弄蛇於市』、

《道路・道端》（「李娃伝」『一夕、棄於道周』）、《橋・橋下》（「擊竹子」『在北門外七里亭橋下盤泊』）、《市街》（「楊于度」『於闐闐中、乞丐於人。』）といった公的権力や個別の人身支配が及びにくい「共同的な空間（聖庇）アジール」的な空間であったことも想起される必要がある。そこに生きる人々は、その外の価値観や規制とは無縁である。自らの生きる世界の約束に従い、生きていく。既存の価値観や規範によって「生」から追いやられ「死」の淵に臨む蔡陽公生を助けたのは、こうした境界に囚われない人々の力が大きく働いたからである。

付け加えれば、「李娃伝」において、蔡陽公生が「乞丐」として「一破甌を持し、閭里を巡り、食を乞ふを以て事と為す。秋より冬に徂き、夜は糞壤窟室に入り、昼は則ち塵肆を周遊す」とある、「糞壤窟室」を考える必要がある。「糞壤」は、『楚辞』離騷に「糞壤を蘇りて以て幃に充たし、申椒は其れ芳しからずと謂ふ」とあり、宋・洪興祖の「補注」には「蘇は取るなり。充は猶ほ満のごときなり。壤は土なり」と言うように、通常は穢れた土あるいは堆肥を指す。また、「窟室」は『左伝』襄公三十年に「鄭の伯有、酒を者む。窟室を為りて、夜酒を飲み鐘を撃つ」とあり、西晋・杜預注に「窟室とは地室なり」とあるように、地中に穿たれた空間を意味する。すなわち、この両語を勘案するに、都長安の糞尿処理・下水処理のための地下施設であったと考えられる。冬季は一定の温度が保たれて寒さを凌ぐことができた。ここでも、前述したこの仕事に関わる人々の存在と物語への介在を考慮すべきであろう。史料はその説明を欠く憾みがあるが、当時の長安の人口約八十万としても、上下両水道及び糞尿処理施設はそれなりに整備されていたと考えざるを得ない。こうした汚穢処理業務に関わる人々も先に見た「凶肆」の人々に連なる階層、すなわち「いやしき人々」に属すると考えられる。

そして、何よりも娼妓である李娃は、「いやしき人」として登場している。当時における娼妓の出身は、戦乱流亡により旧身分を失った者、官妓・私妓の身分が解放されて自由になった者、人身売買された者など種々の出身があったと考えられる。李娃は仮母に対して負債があったと言うから借金に形に身売りした女性という立場である。娼妓もまた身分から言えば良人の支配から外れた民である。遊芸を事とする立場からすれば、一定の職能を持つと言えよう。「乞丐」と結びつく史料は必ずしも多くはないが、以下のような記事が認められる。宋・曾慥『類説』卷一六（雜纂）所引、唐・段安節『楽府雜録』（張紅々）には、以下のようにある。

大暦年間、張紅々という女性が父親と一緒に歌をうたい道端で物乞いをした。韋青はこの女を歌妓として受け入れた。楽人が新曲を作ると宮中に入れる前に韋青に聞かせた。韋青は密かに屏風の後ろに紅紅を立たせ、小豆を使い曲調を記憶させた。歌が終わると紅々に尋ねると、新曲を歌うことができますとの返事。韋青は楽人を欺いて言う。私には女弟子があり、早くにこの曲を歌っていた、新曲ではないのではないかと。屏風越しに歌わせると、楽人一同驚愕して色を失った。敬宗は紅々を宮中に入れ、宮中では紅々を「記曲娘子」と呼んだ。韋青が亡くなると奏上し、わが身は本「風塵丐者」宮中にお仕えできるのも韋青様のご恩。紅々は慟哭して息絶えた。¹⁷

張紅々は父親と共に「唱歌して衢路に乞丐」して歩き、韋青にその才を認められて歌妓として囲われ、やがては敬宗の目にも止まり、宮中に招かれて「記曲娘子（曲調を記憶する姫）」と呼ばれた。一度聞いた曲調を瞬時に記憶できる能力を評価された事を伝えている。自らを「風塵丐者（世俗の乞食）」とみなす底には、路傍に唱歌して糊口を凌ぐ「芸能」を売り物とし、それを「乞丐」して歩く生活者の存在を認めなければならない。ここに芸能を披露して各地を遊歴する「遊女」の存在が垣間見られ、娼妓へと繋がる関係性が示唆される。

この話の場合は、張紅々は市井の乞丐から、韋青の歌妓となり、やがては敬宗の宮中において「記曲娘子」と呼ばれるまでに出世する話として伝わっている。娼妓から高貴な身分をもつ男性の妻（あるいは妾媵）となって幸福に暮らすという伝承があったとすれば、それに連なる人々はそれを支え、その成功を語り伝えていったと考えられる。

六 まとめ

唐・劉餗『隋唐佳話』（中）には、次のような逸話がある。

薛中書元超は親しい者に言った。自分は不才にして過分な富貴を得ているが、日頃三つの不満がある。一つは、進士科に登第できなかったこと、もう一つは五姓の娘を嫁に迎えられなかったこと、残り一つは国史を編纂できなかったことだと。

薛中書元超謂所親曰、吾不才、富貴過分、然平生有三恨。始不以進士擢第、不得娶五姓女、不得修國史。

薛収の子である薛元超は九歳で爵を継ぎ、巢王の娘和靜郡主を娶り、上元三年中書侍郎、同中書門下を歴任している。当時の士大夫として「出仕」「婚姻」ともに遜色はない。その人にしてかく言わしめている風潮があったのである。⁽¹⁹⁾

科挙の進士科が難関であり、「三十老明經、五十少進士（明經合格は三十では遅すぎ、進士合格は五十でもまだ若い）」という俗諺を生んだことから考えても、当時すでに科挙及第が官途における最大の資格であったことは衆目の一致する所であった。また「五姓」とは、清河あるいは博陵の崔氏、范陽の盧氏、趙郡の李氏、滎陽の鄭氏、太原の王氏らの郡望の娘を嫁に迎えること。これと姻戚となることで官界における後援を願い、一層の盤石を期した。国史を修撰するとは、仕官した士人の最も名誉な役割と考えられた。この三要素は、当時の出仕した士人の共通した望みであったと考えられる。劉開榮は滎陽公生が娼妓である李娃を正妻に迎えることは社会背景から言っても、法律上もあり得ないことであると指摘している。⁽²¹⁾

当時の士人における結婚や恋愛に対する倫理や価値観が以前とは変わりつつあった時代とはいえ、およそ娼妓を妻として迎えることは許されないばかりか、当時の価値観や常識から言ってもあり得ないことであった。内助の功績や瑞祥が続くことによって「夫人」の封号を与えられるなどは「奇跡」であって、さらにあり得ないことである。

この不可能を可能に変えた力が那邊に由来するのかを考えるとき、娼妓李娃の背後に広がる物語の伝承者を考えざるを得ない。士人が生きる世界の規範と、それとは別に存在する「俗」なる世界にはたらく力が衝突しかつ融合しつつ、当時の人々が考える文学の規範を大きく変容させていったと考えられる。高貴な身分である滎陽公生が苦難の流浪を経て、やがて立身出世する話に添うように伝えられた「遊女」の物語に、この物語の新しさがあると思われる。

「李娃伝」が物語の外郭として滎陽公生が流亡苦難し、「いやしき人々」によって救済され、やがて立身出世を果たす物語の大枠に依

扱し、それを助ける「遊女」が市井に生きる人々の物語として語り伝えられているとすれば、その伝承者の姿が物語に投影していたとしても不思議はない。「李娃伝」は、確かに李娃や榮陽公生の立身出世の物語ではあるが、恐らくは物語の外郭とそれを支える人々の投影する中身が一致することで、従来の枠組みを大きく突き破るダイナミズムを持ち得たと言える。

如上の仮説がいくばくかの説得力を有するとすれば、「李娃伝」すなわち「一枝花話」という考えからいったん離れて、改めて語り物としての伝承者の影を追いつめる必要があるのではないだろうか。

注

(1) 中国藝術研究院曲藝研究所『説唱藝術簡史』（文化藝術出版社、一九八八年）第二章「唐代的説唱藝術」によれば、①俗講における講唱經文と変文

説話 ③俗賦・詞文及び歌辭 を挙げている。一定の技能と水準にはあつたと指摘し、後世における「話本」との関連を跡づけている。王永平『唐代

游藝』（西北大学出版社、一九九五年）においては、「説書（語り物）」は長安東西の両市において、縁日や法会の際に行われ、「百戯」の一つとして行われた可能性を指摘している。「変文」については、金岡照光『敦煌の文学』（大蔵出版、一九七一年）、唱導文学については、澤田瑞穂『唱導文学の形成』（『仏教と中国文学』所収、国書刊行会、一九七五年）を参照。

(2) 張政烺「一枝花話」（『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』第二十本下冊、一九四八年）

(3) 王夢鷗『唐人小説研究』（芸文印書館、一九七三年）二集第三編「異聞集遺文校補」には、以下のようにある。「類説所録、至此句爲止。末有『舊名一枝花、本説「一枝花自演」十二字。按此十二字似轉錄自元稹酬白樂天百韻詩之自注。原文云、『顧復本説一枝花、自寅至巳。』今此於『本』字上脱『顧復』二字、又誤『寅』爲『演』、下脱『至巳』二字、遂致不可解矣。唯此注語、與四部叢刊本所載者稍異、倘以類説殘文爲證、則四部叢刊本之元氏長慶集未足據也。』」

(4) 該当部分の自注は、元稹集の善本とみなされている明弘治元年（二四八八年）楊循吉據宋本『元氏長慶集』による。現在刊行されている『元稹集』（中国古典文学基本叢書、冀勤点校、中華書局、一九八二年）、『元稹集編年箋注』（楊軍箋注、三秦出版社、二〇〇二年）、『元稹集校注』（中国古典文学叢書、

周相録校注、上海古籍出版社、二〇一一年）などはいずれも異同はない。元稹の自注については、赤井益久「自注の文学―『元氏長慶集』を中心として―」（『中国古典研究』第四七号、二〇〇二年）を参照されたい。

(5) 張兵「一条『話本』資料的探考」（『文学遺産』一九八八年第三期）参照。

(6) 王夢鷗『唐人小説』（芸文印書館、一九七三年）二集第二編「重要篇章及其作者生平新探」「六、李娃傳之來歴及其作者寫作年代」、内山知也『隋唐小説研究』（木耳社、一九七七年）第四章第六節「自行簡と「李娃伝」について」、近藤春雄『唐代小説の研究』第三章第五節「主要作品について」甲愛情小説「李娃伝」（笠間書院、一九七八年）、胡士瑩『話本小説概論』（中華書局、一九八〇年）、傅錫壬『牛李黨争與唐代文學』（東大圖書公司、一九八四年）第三章「黨争與文學」「三、編撰小説以攻訐政敵」「（一）試探李娃傳的寫作動機及其時代」、小南一郎『唐代伝奇小説論』（岩波書店、二〇一四年）第三章「李娃伝―長安のままと人々」参照。

(7) 李劍国『唐五代志怪傳奇叙録』（増訂本）上冊、（中華書局、二〇一七年）第二卷「興盛前期―傳奇文興盛期」五〇八頁。

(8) 程毅中『古小説簡目』（中華書局、一九八一年）「前言」には、古小説の分類上の不統一につき『隋書』経籍志、『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志、『四庫全書』における相違について一表にして指摘している。

(9) 赤井益久「唐伝奇における第三人物形象について」（『國學院雑誌』第九七卷一一号、一九九六年）を参照されたい。

(10) 東西の葬儀組合の競技で期せずして再会した榮陽公父子は、名門の声望を失墜させたという理由で、父親は息子を鞭打つ。その場面、「曲江の西、杏園の東に至り、その衣服を去り、馬鞭を以て之を鞭うつこと数百。生は其の苦に勝へずして斃る。父之を棄てて去る」とあり、父親は封建思想をより所にし、なんとか生きながらえてきた榮陽公生を殺すまで打ち据えたのである。「生」と「死」の境にある印象的な場面であるが、少しく違和感を覚えるのは、「以馬鞭鞭之數百」という鞭打ちの表現である。唐代の小説を見ても使用人を主人が鞭打つ場面はあるが、誇張表現にしてもその憤りの様が窺える。大澤政昭『唐宋時代の家族・婚姻・女性―婦は強く』（明石書店、二〇〇五年）終章「むち打つ者と打たれる者―家族から世帯へ」において、その関係性を指摘した上で「家の秩序を守ろうとする家長の姿がある」と説明している。榮陽公生を「死」へと追いやる権威として父親が描かれていることに注意したい。

(11) 『太平広記』卷二六〇・嘲鄙三「李佐」「唐李佐、山東名族。少時因安史之亂、失其父。後佐進士擢第、有令名、官爲京兆少尹、陰求其父。有識者告後、

往迎之於鬻凶器家、歸而奉養。如是累月。一旦、父召佐謂曰、汝孝行絕世、然吾三十年在此黨中、昨從汝來、未與流輩謝絕。汝可具大豬五頭、白醪數斛、蒜薑數甕、薄餅十拌、開設中堂、吾與群黨一酬申款、則無恨矣。佐恭承其教、數日乃具。父散召兩市善薙歌者百人至。初卽列坐堂中、久乃雜謳、及暮皆醉。眾扶佐父登榻、而薙歌一聲、凡百齊和。俄然相扶父出、不知所在。行路觀者億萬。明日、佐棄家人入山、數日而卒。出獨異志。」

- (12) 『太平廣記』卷三六七・妖怪九「無足婦人」「晉少主之代、有婦人。儀狀端嚴、衣服鉛粉、不下美人、而無腿足。繇帶已下、如截而齊、餘皆具備。其父載之于獨車、自鄴南游浚都、乞丐于市、日聚千人。至于深坊曲巷、華屋朱門、無所不至。時人嗟異、皆擲而施之。後京城獲北戎間諜、官司案之、乃此婦為奸人之領袖、所聽察甚多、遂戮之。出玉堂閑話。」

- (13) 文中の「候」は『広韻』（下平十九侯）であり、「猴」も同。「獼猴猿也」とある。同音による諧声双関であらうと考えられる。

- (14) 『太平廣記』卷四四六・畜獸一三「楊于度」「蜀中有楊于度者、善弄胡猴、于闌閭中、乞丐于人。常飼養胡猴大小十餘頭、會人語、或令騎犬、作參軍行李、則呵殿前後。其執鞭驅策、戴帽穿靴、亦可取笑一時。如弄醉人、則必倒之、臥于地上、扶之久而不起。于度唱曰、街使來、輒不起。御史中丞來、亦不起。或微言、侯侍中來、胡猴即便起走、眼目張惶、佯作懼怕。人皆笑之。（出野人閑話）」

- (15) 『太平廣記』卷四五九・蛇四「安陸人」「安陸人姓毛、善食毒蛇、以酒吞之。嘗游齊安、遂至豫章。恒弄蛇于市、以乞丐為事。積十年餘。有賣薪者、自鄱陽來、宿黃倍山下。夢老父云、爲我寄一蛇與江西弄蛇毛生也。乃至豫章觀步門賣薪將盡、有蛇蒼白色、盤于船中、觸之不動。薪者方省向夢、卽攜之至市、訪毛生、因以與之。毛始欲振拔、應手嚙其乳。毛失聲顛仆、遂卒。食久卽腐壞、蛇亦不知所在焉。出稽神錄」

- (16) 『太平廣記』卷八五・異人五「擊竹子」「擊竹子不言姓名、亦不知何許人。年可三十餘、在成都酒肆中、以手持二竹節相擊、鏗然鳴響、有聲可聽、以唱歌應和、乞丐於人。宛然詞旨皆合道意、得錢多飲酒。人莫識之。如此十餘年矣。一旦、自詣東市賣生藥黃氏子家。從容謂曰、余知長者好道、復多氣義、有日矣。今欲將誠素奉訖、得否。黃氏子曰、君有事、但得言之。擊竹子謂曰、我乞丐之人也、在北門外七里亭橋下盤泊。今病甚、多恐不濟。若終焉之後、敢望特與燒爇。今自齋錢兩貫文、充買柴用。慎勿觸我之心肝、是所托也。陰隲自有相報。因留其錢。黃氏自不取、則固留而去。黃氏子翌日至橋下、果見擊竹子臥於蒹葭之上。見黃氏子來、忻然感謝、徐曰、余疾不起。復與黃氏子金二斤。又曰、昨言不用令人觸我心肝則幸也。珍重且辭、言訖而逝。黃氏子亦惘然出涕、太息者久之。遂令人易衣服、備棺斂、將出於郊野、堆積柴炭、祭而焚之。卽聞異香馥郁、林鳥鳴叫。至晚、只餘其心、終不燃燼、復又其大如斗。黃氏子收以歸城、速語令人以杖觸之。或聞炮烈、其聲如雷、人馬皆駭。逡巡、有人長尺餘、自煙焰中出、乃擊竹子也。手擊其竹、嘹然有聲、

杳杳而上。黃氏子悔過作禮。衆人皆歎奇異。於戲、得非不觸其心、復在人間乎。觸其心、便可上賓乎。復欲於黃氏子顯其蛻化乎。始知成都乃神仙所聚之處、如擊竹子者、亦以多矣。大凡不可以貧賤行乞之士而輕易者焉。」

- (17) 宋・曾慥『類說』卷一六（雜纂）の該当部分には異同が多い。ここでは『類說校注』（王汝濤等校注、福建人民出版社、一九九六年）による校勘を経た本文を掲げておく。「張紅紅大曆中、才人張紅紅、本與其父唱歌丐於衢路、韋青納爲姬。嘗有樂工撰新聲、未進先侑歌於青。青潛令紅紅聽於屏後、以小豆數合記其拍。歌罷、青人問之、云已唱得矣。青出給云、某有女弟子、蚤曾唱此、非新曲也。隔屏唱之、一座失色。敬宗召入宮、宮中號記曲娘子。韋青卒、紅紅奏曰、妾本風塵丐者、致身入內、不忍忘其恩。因一慟而絕。」

- (18) 韋青については正史に伝記が認められない。ただ、『全唐詩』（卷七九五）に「三代掌綸詰、一身能唱歌」の散句を伝えており、その歌唱における能力が優れていたことが窺われる。

- (19) 『新唐書』卷九八、「薛元超伝」

- (20) 唐・王定保『唐摭言』卷一「散序進士」

- (21) 劉開榮『唐代小説研究』（台湾商務印書館、一九四五年初版）では、唐代の小説執筆の背景に「牛李の党争」の存在を認め、対立する党派の誹謗中傷を意図していたとみなしている。その代表的作品に「周秦行紀」を挙げ、「李娃伝」もその一環であることを指摘している。「『李娃伝』の謎究竟是什麼。它的男主角是當時第一流高門鄭州蔡陽公的公子、和前面所說被迫娶宣宗愛女的鄭顯是本案。女主角則出人意外的一位長安的倡女李娃。進士在未婚前逛妓院、是當時最普遍的現象、如說娶倡女爲正室、並且由老蔡陽公出來作主、用六禮迎娶、這是當時社會絕對辦不到的事情。這個故事的結局絕對是悲劇、不可能是喜劇。如『復活』『茶花女』兩部西方名作、雖極端當於刺激性及革命性、然而作者的安排、仍然是悲劇的結局、不如此、則違反現實、作者在撒謊騙人了。『李娃傳』的本事除了社會背景的不可能以外、看有法律上的不可能。」「其次、唐人妾媵制度很盛、一般妓女的最大出路就是嫁與富貴人家爲妾。所以這位李娃、即或於鄭公子有大德有愛情、可以嫁與他爲妻。這是傳奇小説中大多數貴族與妓女戀愛的必然結果。唐人以妾爲妻、尚被認爲觸犯名教破壞禮法、堂堂的蔡陽鄭家又豈能娶倡女爲妻。所以由各方面的情形來推測、作者寫『李娃傳』決不是尋常寫小説而已、他必定有令人不解的特殊動機和不能言隱衷、彷彿『周秦行紀』的作者一樣、只藉小説爲罵人的工具罷了。」「李娃伝」の持つ矛盾、すなわち長安の娼妓を正妻に迎えるという不可能を克服するために、蔡陽の鄭氏を貶めんがために小説を書いたという解釈をしている。小説を解釈する上で、歴史的事実に本事を求める場合には、それで

なければ説明がつかない場合でなければならず、「李娃伝」の場合にはその限りではない。